

漢詩で遊ぶ『説文解字』研究

新井 宏

ある日突然、漢詩を作ってみようと思い立った。平成二十五年六月一日のことである。

数日後に行われる「鯨会」の話題にしようという心積もりであったが、実は古代漢字の研究に新しい切り口を求めているのである。

そもそも「鯨会」とは、我が畏友、まんじ同人の鯨游海氏が主催する「漢詩の会」である。既に二十年も続いているが、近年では「交流サロン」と化していて実態は「飲み会」に近い。しかし、漢詩の「平仄」すなわち声調(トーン)は、日本語や韓国語にはなく中国語特有のもので、これを「鯨会」で勉強しない手はない。

日頃、学問体系の中で最も美しいのは「統計学」と「言語学」だと語ってきた。「統計学」については、先日『統計学が最強の学問である』というベストセラーが出て、先を越されてしまったが、「言語学」の方はまだまだチャンスがある。

言語学の研究に、平仄を利用してみたい。それには伏線があった。

『まんじ』第一二八号に鯨游海氏が、中国清末の龔自珍の漢詩を紹介していた。作者の母が段玉裁の娘であるとの目立たぬ注があった。

段玉裁と言えば、漢字学の聖典、後漢の許慎が著した『説文解字』(以下『説文』)について、空理空論を廃し、実証主義的な立場から研究して、大著『説文解字注』、略して『段注』を著した大学者である。その薫陶を受けた龔自珍が清の漢詩の代表格だという。『漢詩』と『説文』の間に何かひらめくものを感じた。

『段注』が完成したのは一八〇七年、刊行されたのは一八一三年である。

ちょうどその頃、我が愛する狩谷棧齋も一八〇八年に『説文新附字考』を纏め、『説文』のデータベースともいうべき『説文檢字篇』の編纂に取りかかっていた。

た。清国でも日本でも、朱子学(宋学)への批判から実証による漢字への復古の流れが興っていた。

日本における『説文』研究は、「三絶」と称された三学者、すなわち狩谷棧齋、松崎慊堂、山梨稲川によつて、文政・天保の頃には中国とほとんど時間差なく全盛期を迎えていた。『まんじ』一〇七号から一一七号まで十回にわたつて連載した「狩谷棧齋讃歌」に「三絶」のことは詳しく書いた。

その中でも特筆すべきは、山梨稲川であった。彼は漢字を「旁」により分類するという独創的な方法によつて『説文』を研究し、漢代以前の古音の存在に初めて気付いた人物である。日本には呉音や漢音の他に推古朝の万葉音が残っていたことが研究を利したに違いないが、残念ながら後継者なく、その後あまり注目されることがなかった。

むしろ山梨稲川が有名になったのは「漢詩」の方である。それは中国清末の碩儒、俞曲園が日本人の漢詩を編集して『東瀛詩選』として出版した際に、広瀬旭莊に次いで山梨稲川の詩を六十八首も入れたからである。

『説文』の研究は「漢詩」と密接に絡んでいる。ここでも赤い糸が張られているのを感じた。

古代漢字の研究にあつては、字画や音韻(発音)ばかりでなく、漢字が持つ声調(トーン)すなわち平仄を勉強しなければなるまい。

平仄判定ソフト

まずは手始めに、平仄すなわち「平水韻」の四声(平声Ⅱ平、上声十去声十入声Ⅱ仄)と韻目一〇六韻を判別するパソコンのソフトを開発することにした。

「平水韻」とは、唐代の韻書の「切韻」や「唐韻」を増訂した「広韻」を引継いで十三世紀頃完成した韻書で、「漢詩」の押韻の根拠として現在に至るまで用いられているため、「詩韻」とも言われている。だから、その平仄や韻目(発音)を知らなければ、「平仄に合い韻を踏む」漢詩は作れない。

曲がりなりにも漢字を読める日本人にとっては、韻目を覚える手掛りはあつても、中国漢字の声調を知らないのも、平仄については手も足も出ない。だから、これを知識として覚えるか、あるいはその都度、漢和辞典で調べるしかない。これでは煩雑過ぎる。

搜して見ると、既成のパソコンソフトもあるが、ソフトが公開されていないので勝手に改変する事ができない。

幸いなことに、三年ほど前に簡単なソフトを自作したことがある。その当時は、漢詩に重要な「平声」の

み三十韻二千字ほど入力しただけで、平でなければ仄と判定するという乱暴なものであった。しかも、常用漢字と旧漢字が不揃いで「漢詩」の文字列を入力しても誤判定が生じる場合があり、評判が芳しくなかった。

そこでまず常用漢字、旧漢字を問わず、俗字、略字も含めて、一〇六韻を全てパソコンに登録することにした。

有りがたいことに、インターネット上にかなりの平仄表(四声韻目表)が掲載されている。これを借用してパソコンで重複を整理して、登録できたのが一万二千字ほどである。前に比較すれば桁違いの改善である。

かくして、判定精度は飛躍的に向上したが、それでも問題が残った。漢字によつては、両韻と言つて、平仄や韻目が複数にまたがっている場合があり、しかもそれが「漢和字典」によつてマチマチなのである。要は諸橋轍次の『大漢和辞典』のように、いろいろな「韻書」の記録を全て記載すれば「両韻」が増えるが、普段は使わない場合も多くなり、かえつておかしくなる。どうやら、ほどほどが良さそうである。

そこで、ソフトの中庸性を検証するために、実際の「漢詩」を例題として入れて、誤判定がどの程度生じるか調べて見た。

この場合も、幸いなことに、インターネット上に、『唐詩選』とか、日本の漢詩、朝鮮の漢詩、あるいは

夏目漱石や森鷗外、毛沢東らの漢詩などが載っている。自分の興味で集めた「漢詩」も入れると「七言絶句」で百数十首ほどになる。文字数で言えば三千六百字強である。

「七言絶句」の作詩上のルールは簡単である。「二四不同」と「二六対」そして「押韻」である。すなわち、各句の二字目と四字目の平仄は「不同」、二字目と六字目の平仄は「対(同)」、そして起句、承句、結句の句末では同韻を用い「押韻」することである。もちろん、この他に「下三連同韻禁」とか「四孤平禁」などの規制や「挟み平」「通韻」などの救済法もあるが、わずかな数行で基本を示せるルールがすばらしい。

集めた「七言絶句」の「ルール違反」を「機械的にチェック」した結果は次の通りである。

唐詩選	四二首	違反三首、挟み平四句。
朝鮮漢詩	一六首	違反なし、挟み平一句。
日本漢詩	三二首	違反一首、挟み平一句。
夏目漱石	一一首	違反なし。
森鷗外	一五首	違反二首、挟み平一句。
毛沢東	一四首	違反五首。

番外の毛沢東を除くと、違反は「一六首中に六首に過ぎないし、挟み平の救済も七句である。」「違反」が多いのは『唐詩選』であるが、念のため漢和辞典で再チェックしたが判定に誤りはない。

もちろん「違反」が「間違い」を意味する訳ではない。初心者の場合なら「違反」が即「間違い」とも言えようが、時代を経た漢詩は、むしろ「違反」によって詩の品格を高めているとも聞く。

日本漢詩の違反は服部南郭の著名な「夜墨水を下る」にあった。起句「金龍山畔江月浮」の「畔」は平声でなければならぬが、去声一五翰となっている。

また森鷗外に違反の例を二首みるが、そのひとつの「筑波山少女村」の「路人」は、李白の「黃鶴樓送孟浩然之広陵」の「故人」と同じ用法であり、それを学んだものらしい。また、もうひとつは押韻の違反であるが、これは解説者も同じく違反を指摘している。

番外として載せた毛沢東の場合は十四首中五首に違反がある。あるいは現代音による作詩の影響かと疑ったがその傾向は見られない。ついにながら毛沢東の「七絶」には数詞を含むものが十四首中に十二首もあり、どこか「白髪三千丈」の響がある。もつとも、日韓中を問わず、数詞を含む「七絶」を数えて見ると六割を超えているので、余計なお節介かも知れない。かくして、パソコンソフトの平仄のチェックがほぼ完璧であることを確信できた。

ところで、ここまでチェックしたので、もう少し深入りしてみる。世の中には奇抜な人がいて『全唐詩』

の七言絶句から七五六首を選び、各種のルール違反をチェックしている(注1)。

結果だけを言えば、「二四不同・二六対」の違反は七五六首の内一四首あるという。15%の違反率であり、前述した『唐詩選』の名句四十二首中三首の違反などは、むしろ低い率なのである。

それに較べると、日本や朝鮮の漢詩の場合は、違反が七十四首中三首に過ぎず一桁少ない。そこには、声調すなわち平仄を知らないことで、本場の中国に輕蔑されたくないという「後進国意識」が反映されていたのかも知れない。

漢詩習作

もともと本気で漢詩を作ることなど考えていない。しかし、なぜこんなやこしい平仄まで覚えて「漢詩をつくるのか」という素朴な疑問に答えるためには、自作してみるのが近道である。

とにかく、漢字列を放り込めば、ソフトで平仄や押韻が簡単に判別できるのであるから、後は「詩想」次第である。過去の旅行記などから詩題を選んで良いが、ここは難しく考えずに「盗作」で行くことにする。

「懐かしのメロディー」や「歌声喫茶の曲」には心打つ「歌詞」がたくさんある。それを漢文らしく編成し

て、クロスワードパズルのように、位置を変え用字を替え、形式に合うようにしてみる。ルール違反のチェックは熟達者なみのソフトが付いているから安心である。

やってみると、結構面白い。

盗作による「詩想」は習作に香りを添えてくれるし、ルール厳守で、平仄も押韻も合っている。もちろん、「唐詩」などから用字や用法を学ぶ術はないが、新型漢詩とでも強弁すれば、認めてもらえるかも知れない。形式を合わせるだけなら、一時間で一首くらいはできる。十首ほど作って見たものから、若干推敲して例示する。どの程度、原詩(注2)が判るであろうか。四首とも判った方は私と「青春」を共にした方であろう。

遠別不堪高殿登
莫悲我友旅装興
古今折柳人生習
何日再逢聞雁征

白銀富士緑江門
今泪不帰十二魂
荒海舟沈衰力尽
彷徨何処戾母元

樨森葉隱宴遊盛
敷葉倨居照赤明
眼睜髮清煌焰火
憩男酌女異邦氓

火山麓邑麦蕎香
花木梢雲滿緑岡
落葉松林清水湧
気高白樺霧濡光

このようにして習作を試みた感想といえば、クロスワードパズルの楽しさである。平仄を教養として知るエリートだけが参加できる「七言絶句の枠に閉じ込めるゲーム」といえば良いだろうか。『唐詩選』などからそつと香りを添えて、詩想を表現できた時には、喝采を呼びたい気持になるのだらう。

だから、多くの『唐詩選』などを誦んじる愛好家にとっては、パソコンソフトなど目障りとの思いもあるかも知れない。誤解もあらうが次に進む。

現代中国人は平仄を知るか

漢字に抑揚を付けて発音する中国人なら、「平仄」を覚えるのに大きな困難はないと思っていた。それに反して、もともと漢字の抑揚とは無縁の日本人が「平仄」をむきになって覚えて、漢詩をつくることなどアナクロニズムだと思っていた。

ところが、そうでもないらしい。

それは、日本の漢字音を朝鮮の漢字音と比較し、更に現代北京語の発音や声調と比較している内に、簡単に気が付いた。

話がかたくなるが、ここで平仄や音韻について、日本や韓国の漢字音と比較しながら簡単に述べる。

既に述べたが、平仄とは、漢字音を唐代の声調(トー

ン)によって大きく二種類に分けたもので、平には平声、仄には上声・去声・入声があり、これらを合せて四声という。しかし、その四声は漢字の韻目(発音)とは無関係にできている。

日本の漢字音で最も多い発音は「コウ」で普通の漢和辞典でも四五〇字ほど載せている。

この内、当用漢字に準ずるものだけでも六〇字ほどあるが、これらを韓国の漢字音と比較してみると次のようになっている。ハングルのローマ字読みは正確ではないが参考に示す。

高…고 (KO)、交…교 (KYO)、拘…구 (KU)、江…강 (KAN)、光…광 (GAN)、香…향 (HYANG)、行…행 (HEN)、更…정 (KYON)、宏…영 (KYON)、公…공 (KON)、興…흥 (HUN)、紅…토 (KUN)、甲…갑 (KAP)、劫…집 (KOP)。何と日本漢字音では全て「コウ」で済ませているのに、韓国では十四種類の音韻に分けているのである。日本人の発音が如何に単純化しているかよく判るであろう。

このような現象は何も「コウ」だけではない。「コク」を見ても、韓国では六種類に分けている。

克…극 (KUK)、刻…각 (KAK)、告…고 (KO)、国…국 (KOK)、石…석 (SOK)、黒…흑 (HUK)

以上のローマ字表記を見て判るように、韓国の漢字音は、KAN、KOP、KUK、SOKなど全て、(頭子音十母

音十末子音)の閉音節で出来ている。子音が欠けている場合もあるが、それは空子音と理解する。調べてみると中国語の場合も同じである。

音韻学では、頭子音を「声母」、母音十末子音を「韻母」と言って、これを縦と横に配列して「音韻」を示したものを「半切表」と言う。ローマ字やハングルでの表示なら極めて判り易いが、発音記号に「漢字」を用いる中国語の半切はなじみにくい。

それに対して日本の漢字音はコウやコクのように、(頭子音十母音)十(次子音十母音)の二音の開音節となる。もしコウ、カクについて日本式の半切表を作るとすれば、「声母」にコとカ、「韻母」にウとクとなるのであるうか。変な話である。

要は、日本では末子音として許されるのは[n]だけなので、他の子音で終わる閉音節の漢字を受入れる時には、末子音を[n]に替えてしまおうか、母音を付けて二音節とせざるを得なかったのである。

調べてみると、日本漢字の二音節目の発音は、イ、ウ、キ、ク、チ、ツの六種類しかない。日本の漢字音には、呉音や漢音、唐音など複数の「読み」があるので、同じ漢字が重複して集計されるが、「読み」を基準に分布を調べると、最も多いのが、ウで27%、次はイで12%、クが8%、ツが6%、キが2%、最も少ないのがチで0.2%である。その他に、一音節の開音節(母音

表1 平水韻末子音の韓国、北京、日本での変化

平水韻	韓国語 末子音	北京語 末子音	日本語 2音節末
末子音 [ŋ]	[ŋ]	[ŋ]	ウ(イ)
末子音 [p]	[p]	消失	ウ
末子音 [k]	[g]	消失	キ、ク
末子音 [t]	[r]	消失	チ、ツ
末子音 [n]	[n]	[n]	ン
末子音 [m]	[m]	[n]	ン

末子音 [ŋ] の漢字では、京経境競鏡卿慶敬兄刑など漢音で「ケイ」、呉音で「キョウ」と発音する場合がある。ただし日本漢字末音がイとなっても [ŋ] とは限らない。

さて、ここまで述べると、要するに日本では、漢字の音韻さえも大きく変化させて受入れており、ましてや平仄に関連する声調は全く受入れなかったのであるから、その「読み」から平水韻の韻目や平仄を推測することなど絶望的に思えてくる。ところがそうでもない事情がある。

唐代の「音韻」と「平仄」は一部で関係していたのである。すなわち、唐代にあって、末尾の

止め)が24%、末子音が21%ある。ついでに、平水韻の末子音と北京語および日本語の関係を整理してみると表1のようになってい

子音に、[p]、[k]、[t]を持つ漢字は全て「入声」とされていた。しかしこれら末尾の子音は表1に示すように、現代北京語では全て失われてしまい、「入声」そのものも無くなってしまっている。それが日本漢字ならかなり判る。

言語学の面白さは、世界各地域での発音の変化に「単純化」の法則性があることである。複数の子音が入混じった発音では、どんな子音が失われて行くし、二重母音や複母音は単母音化する。

たとえば、初期言語の発音は「動物の叫び声」のようなもので、ルビの振りようがないほど多くの子音を含むが、言語が発達すると母音系の単純な音韻の組合せを主体とする比率が高まるのである。

発音の単純さから見ると、世界の言語の中でも、日本語のように一二音しか音節がない言語がある反面、韓国では漢字音だけでも四五〇音もある。現代中国の漢字音は四〇六音と言うが、おそらく古代中国ではもっと多くの発音があつたに違いない。しかも、漢字では音韻と声調を組み合わせると別の意味をもち、別の漢字を必要とするので、その数はすぐに数万にも上る。だから康熙字典に五万字も収録されることになったのである。(ついでに言えば、英語の音節は三千種ほどある)。

そこで気が付いた。

日本で漢語と言えば、政治、経済、社会など二文字の熟語のことである。だから音読で一文字の漢字使うのはとても座り心地が悪い。ところが、中国では、基本的に一字一語であるから、しいて熟語に頼らなくとも良かった。熟語が普及するのは唐代になってからというが、一字一語の原理がまだ唐詩には強く反映されていたのではないか。

習作の時に、平仄とか押韻とか面倒な規制があると、熟語や固有名詞は使いにくいと知った。しかし、漢詩では個々の漢字をばらばらにしてクロスワードパズルのに使っても良いのではないか。これは言語文化の相違だ。

前述のように、日本では漢字を受入れた時に末子音をそのまま残すことは出来なかった。だから母音を付けて、[k]はキとクに、[t]はチとツに変えてしまったのである。ちなみに、キ、ク、チ、ツの第二音節を持つ漢字は例外なく全て「入音」であり仄であり、合計して16%ある。

したがって、この分だけは、日本人なら「入声」すなわち仄と簡単に判る。ましてや、[k]、[t]、[r]の他に[p]までそのまま残している韓国では、なおのこと完全に判る。

ところが本家本元の北京語では、これらの子音を全て消失してしまったために、全く別の声調に変わらざ

表2 平水韻の四声と現代北京語の四声比較

平水韻		現代北京語の平仄と四声						合 計
平 仄	四 声	平			仄			
		隱平	陽平	合 計	上 声	去 声	合 計	
平	平 声	884	904	1788	55	112	167	1955
仄	上 声	40	31	71	603	211	814	885
	去 声	88	86	174	104	901	1005	1179
	入 声	118	250	368	39	369	408	776
	合 計	246	367	613	746	1481	2227	2840
合 計		1130	1271	2401	801	1593	2394	4795

平水韻表は <http://www.geocities.jp/aydahn42df5/heisui.html>
 北京語の平仄と四声は <http://www.frelax.com/sc/service/pinyin/>

平水韻[平声]が北京音[平声]である確率は91.5%

平水韻[仄声]が北京音[仄声]である確率は78.4%

北京音[平声]が平水韻[平声]である確率74.5%

北京音[仄声]が平水韻[仄声]である確率88.9%

4795字の他に、北京音で両韻を示す182字があるが集計除外

るを得なくなった。そのため、現代の中国人は、平水韻の「平声」や「上声」、「去声」を継承できていても、「入声」が判らなく、その上、それを再配分しているので「平仄」の区別が正確にはできないのである。

論より証拠である。ここで、現代の北京語の「平仄」と昔の「平水韻」の関係をパソコンで調べてみた。対象とした平水韻表と北京音はいずれもインターネット上に掲載されているソフトを活用した。第2表のようになっている。

平水韻による平声は現代北京語でも92%ほどが隠平または陽平であり、大まかには対応関係が維持されている。しかし逆に、現代の「平声」すなわち隠平か陽平であっても、平水韻の「平声」である確率は75%に過ぎない。これでは、現代中国人も、「平水韻」の表を暗記するか、その都度「平水韻表」で確認しないと「漢詩」は作れない。

参考のために、前述の『唐詩選』四十二首について、現代北京韻の平仄を用いて「二四不同・二六対」を調べたところ、二十六首が違反する結果になっていた。

だから、結論的に言えば、日本人も韓国人も中国人も漢詩の基礎である「平水韻」についての知識など五十歩百歩で、日本人ばかりがアナクロニズムという訳ではないのである。

ハングルと平水韻

韓国語を知ると古い漢字音をかなり正確に残しているように見受けられる。それはハングル文字を創出する段

階で、第四代の世宗を支えた申淑舟や成三間が、明の翰林学者・音韻学者の黄贊から教えを受けるために、遼東を十三回も往復して学んだことから判る。外交官・政治家で六代の王に仕えた申淑舟は『四声通考』や『東国正韻』を著した音韻学者でもあった。そのことは『まんじ』七六号の「仮名に着想を得たハングル」でかなり詳しく書いた。

だから、韓国漢字音に基づき、平水韻表を作成して見ると、新しい知見が得られるかも知れない。なにより魅力的なのは、ハングルでは「韻母」を現す発音が「声母」とは無関係に統一的に示されており、音韻研究には非常に便利なことである。

結果を表3(文末)に示す。同一のハングル「韻母」が平水韻の韻目と大まかには良く対応している様子が分かる。日本漢字音ではとてもこのような具合には行かない。

そしてぜひ知ってほしいのが、同一韻目のハングル韻母が、四声との関係で見ると、全く義理がたく、平音、上音、去音に三分の一ずつに配分されているのである。ここでも同一の発音の漢字が、平仄と無関係なのがある。だから、声調を知らない韓国語では、丸暗記しない限り平仄の判定ができるわけがない。

いやいや韓国語に限らない。中国語でも「旁」を同じくする漢字なら基本的には同じ発音を持つ。

例として、「旁」が「方」で[fang]と発音する漢字の四声を調べてみると次のようになっている。

〔平〕 下平聲 七陽 方妨防彷彿沆魴

上声二十二養 紡 彷彿 仿 昉

仄 去聲二十三漾 訪舫妨

仄 去聲二十四敬 枋

これらの漢字について、現代北京音を調べると、**「平」**

から「仄」に変わったものに彷彿、「仄」から「平」に変わったものに彷彿がある。かなり良く平仄を継承しているようであるが、それでも一／＼二割は変化している。

それにしても、表3は良くできていると自画自賛している。本稿に載せる必要など無いのだが、無理にでも見て頂きたく載せた。だから、これ以上のコメントはしない。

私の『説文』研究

私の言語学研究的目標は、狩谷棧齋の「説文」研究の継承であるが、実際の当面の興味は、漢字「弓」「氏」「丕」のルーツを探ることである。いずれも「弓」「氏」「丕」の下に「一」を添えているが、このような類字は、弓、氏、丕の他には「旦」のみであろう。

たつた数文字しかないこれらの漢字が、偶然かも知れないが、我が趣味の研究生活においては大きな意味

を持ってゐる。その内容については後ほど述べるとして、『説文』的な解明方法としては、なんと云つても山梨稲川の「旁」の研究に学ばねばなるまい。

山梨稲川は明和八年（七七二）、静岡県庵原の名主の家に生れた。松崎慊堂と同年で被斎より四歳年上、荻生徂徠の流れを汲む陰山豊洲に学び、古文辞学から『説文』の研究に入っている。

稲川の研究方法は、漢字の部首のうち、右側に位置する旁により漢字を分類すると言う独創的なもので、漢代以前の古音に気付いた最初の学者である。例えば、台・怡・始などが、『説文』では異なる発音であるが、古音では全て「タイ」であつたのである。

ちなみに、日本漢字音では「タイ」に台胎殆拾殆詒
駘怡殆殆殆詒鉛鉛が、「イ」に飴怡詒詒殆殆殆が、「シ」
に始怡殆鉛がある。

それでは、「丕」から始めよう。

わが敬愛する鯨游海氏が『論語』卷一為政篇の「君子不器」は「君子不器」という「学説」を今から十数年ほど前に出した。

「君子は器にあらず」では解釈が恣意的にならざるを得ず納まりが悪い。それに対して、「君子不器」説ならば、不の古義に「丕」すなわち「大」の意味があるので、「君子大器」となり、すんなりと理解できる。

もちろん「君子不器」説は、そんな単純な論拠にばかり依っている訳ではないが、「論語研究」の二千年の定説を覆す貴重な「新説」である。

では、これを漢字から見てみたらどうなるのだろうか。

まず、不と丕の旁に持つ漢字を全て書き出して見る。こんな時に、パソコン文字ソフトのATOKが抜群に威力を発揮する。『説文』のデータベース作りに苦労した山梨稲川や狩谷楢齊が知ったら、むなしさを感じてしまうと思うが、わずか五千円で手に入る。

ATOKによれば次のようになっている。

不の旁で発音が「ハイ」 杯坏杯坯杯坏杯坏杯坏杯坏

(韻目は上平声十灰)

丕の旁で発音が「ハイ」胚坯岷杯

(韻目は上平声十灰)

不の旁で発音が「ヒ」
休鉢

不の旁で発音が「ヒ」

丕 𠂔 𠂕 𠂖 𠂗 𠂘 𠂙 𠂚 𠂛 𠂜 𠂝 𠂞 𠂟 𠂠 𠂡 𠂢 𠂣 𠂤 𠂥 𠂦 𠂧 𠂨 𠂩 𠂪 𠂫 𠂬 𠂭 𠂮 𠂯 𠂰 𠂱 𠂲 𠂳 𠂴 𠂵 𠂶 𠂷 𠂸 𠂹 𠂺 𠂻 𠂼 𠂽 𠂾 𠂿 𠃀 𠃁 𠃂 𠃃 𠃄 𠃅 𠃆 𠃇 𠃈 𠃉 𠃊 𠃋 𠃌 𠃍 𠃎 𠃏 𠃐 𠃑 𠃒 𠃓 𠃔 𠃕 𠃖 𠃗 𠃘 𠃙 𠃚 𠃛 𠃜 𠃝 𠃞 𠃟 𠃠 𠃡 𠃢 𠃣 𠃤 𠃥 𠃦 𠃧 𠃨 𠃩 𠃪 𠃫 𠃬 𠃭 𠃮 𠃯 𠃰 𠃱 𠃲 𠃳 𠃴 𠃵 𠃶 𠃷 𠃸 𠃹 𠃺 𠃻 𠃼 𠃽 𠃾 𠃿 𠄀 𠄁 𠄂 𠄃 𠄄 𠄅 𠄆 𠄇 𠄈 𠄉 𠄊 𠄋 𠄌 𠄍 𠄎 𠄏 𠄐 𠄑 𠄒 𠄓 𠄔 𠄕 𠄖 𠄗 𠄘 𠄙 𠄚 𠄛 𠄜 𠄝 𠄞 𠄟 𠄠 𠄡 𠄢 𠄣 𠄤 𠄥 𠄦 𠄧 𠄨 𠄩 𠄪 𠄫 𠄬 𠄭 𠄮 𠄯 𠄰 𠄱 𠄲 𠄳 𠄴 𠄵 𠄶 𠄷 𠄸 𠄹 𠄺 𠄻 𠄼 𠄽 𠄾 𠄿 𠅀 𠅁 𠅂 𠅃 𠅄 𠅅 𠅆 𠅇 𠅈 𠅉 𠅊 𠅋 𠅌 𠅍 𠅎 𠅏 𠅐 𠅑 𠅒 𠅓 𠅔 𠅕 𠅖 𠅗 𠅘 𠅙 𠅚 𠅛 𠅜 𠅝 𠅞 𠅟 𠅠 𠅡 𠅢 𠅣 𠅤 𠅥 𠅦 𠅧 𠅨 𠅩 𠅪 𠅫 𠅬 𠅭 𠅮 𠅯 𠅰 𠅱 𠅲 𠅳 𠅴 𠅵 𠅶 𠅷 𠅸 𠅹 𠅺 𠅻 𠅼 𠅽 𠅾 𠅿 𠆀 𠆁 𠆂 𠆃 𠆄 𠆅 𠆆 𠆇 𠆈 𠆉 𠆊 𠆋 𠆌 𠆍 𠆎 𠆏 𠆐 𠆑 𠆒 𠆓 𠆔 𠆕 𠆖 𠆗 𠆘 𠆙 𠆚 𠆛 𠆜 𠆝 𠆞 𠆟 𠆠 𠆡 𠆢 𠆣 𠆤 𠆥 𠆦 𠆧 𠆨 𠆩 𠆪 𠆫 𠆬 𠆭 𠆮 𠆯 𠆰 𠆱 𠆲 𠆳 𠆴 𠆵 𠆶 𠆷 𠆸 𠆹 𠆺 𠆻 𠆼 𠆽 𠆾 𠆿 𠇀 𠇁 𠇂 𠇃 𠇄 𠇅 𠇆 𠇇 𠇈 𠇉 𠇊 𠇋 𠇌 𠇍 𠇎 𠇏 𠇐 𠇑 𠇒 𠇓 𠇔 𠇕 𠇖 𠇗 𠇘 𠇙 𠇚 𠇛 𠇜 𠇝 𠇞 𠇟 𠇠 𠇡 𠇢 𠇣 𠇤 𠇥 𠇦 𠇧 𠇨 𠇩 𠇪 𠇫 𠇬 𠇭 𠇮 𠇯 𠇰 𠇱 𠇲 𠇳 𠇴 𠇵 𠇶 𠇷 𠇸 𠇹 𠇺 𠇻 𠇼 𠇽 𠇾 𠇿 𠈀 𠈁 𠈂 𠈃 𠈄 𠈅 𠈆 𠈇 𠈈 𠈉 𠈊 𠈋 𠈌 𠈍 𠈎 𠈏 𠈐 𠈑 𠈒 𠈓 𠈔 𠈕 𠈖 𠈗 𠈘 𠈙 𠈚 𠈛 𠈜 𠈝 𠈞 𠈟 𠈠 𠈡 𠈢 𠈣 𠈤 𠈥 𠈦 𠈧 𠈨 𠈩 𠈪 𠈫 𠈬 𠈭 𠈮 𠈯 𠈰 𠈱 𠈲 𠈳 𠈴 𠈵 𠈶 𠈷 𠈸 𠈹 𠈺 𠈻 𠈼 𠈽 𠈾 𠈿 𠉀 𠉁 𠉂 𠉃 𠉄 𠉅 𠉆 𠉇 𠉈 𠉉 𠉊 𠉋 𠉌 𠉍 𠉎 𠉏 𠉐 𠉑 𠉒 𠉓 𠉔 𠉕 𠉖 𠉗 𠉘 𠉙 𠉚 𠉛 𠉜 𠉝 𠉞 𠉟 𠉠 𠉡 𠉢 𠉣 𠉤 𠉥 𠉦 𠉧 𠉨 𠉩 𠉪 𠉫 𠉬 𠉭 𠉮 𠉯 𠉰 𠉱 𠉲 𠉳 𠉴 𠉵 𠉶 𠉷 𠉸 𠉹 𠉺 𠉻 𠉼 𠉽 𠉾 𠉿 𠊀 𠊁 𠊂 𠊃 𠊄 𠊅 𠊆 𠊇 𠊈 𠊉 𠊊 𠊋 𠊌 𠊍 𠊎 𠊏 𠊐 𠊑 𠊒 𠊓 𠊔 𠊕 𠊖 𠊗 𠊘 𠊙 𠊚 𠊛 𠊜 𠊝 𠊞 𠊟 𠊠 𠊡 𠊢 𠊣 𠊤 𠊥 𠊦 𠊧 𠊨 𠊩 𠊪 𠊫 𠊬 𠊭 𠊮 𠊯 𠊰 𠊱 𠊲 𠊳 𠊴 𠊵 𠊶 𠊷 𠊸 𠊹 𠊺 𠊻 𠊼 𠊽 𠊾 𠊿 𠋀 𠋁 𠋂 𠋃 𠋄 𠋅 𠋆 𠋇 𠋈 𠋉 𠋊 𠋋 𠋌 𠋍 𠋎 𠋏 𠋐 𠋑 𠋒 𠋓 𠋔 𠋕 𠋖 𠋗 𠋘 𠋙 𠋚 𠋛 𠋜 𠋝 𠋞 𠋟 𠋠 𠋡 𠋢 𠋣 𠋤 𠋥 𠋦 𠋧 𠋨 𠋩 𠋪 𠋫 𠋬 𠋭 𠋮 𠋯 𠋰 𠋱 𠋲 𠋳 𠋴 𠋵 𠋶 𠋷 𠋸 𠋹 𠋺 𠋻 𠋼 𠋽 𠋾 𠋿 𠌀 𠌁 𠌂 𠌃 𠌄 𠌅 𠌆 𠌇 𠌈 𠌉 𠌊 𠌋 𠌌 𠌍 𠌎 𠌏 𠌐 𠌑 𠌒 𠌓 𠌔 𠌕 𠌖 𠌗 𠌘 𠌙 𠌚 𠌛 𠌜 𠌝 𠌞 𠌟 𠌠 𠌡 𠌢 𠌣 𠌤 𠌥 𠌦 𠌧 𠌨 𠌩 𠌪 𠌫 𠌬 𠌭 𠌮 𠌯 𠌰 𠌱 𠌲 𠌳 𠌴 𠌵 𠌶 𠌷 𠌸 𠌹 𠌺 𠌻 𠌼 𠌽 𠌾 𠌿 𠍀 𠍁 𠍂 𠍃 𠍄 𠍅 𠍆 𠍇 𠍈 𠍉 𠍊 𠍋 𠍌 𠍍 𠍎 𠍏 𠍐 𠍑 𠍒 𠍓 𠍔 𠍕 𠍖 𠍗 𠍘 𠍙 𠍚 𠍛 𠍜 𠍝 𠍞 𠍟 𠍠 𠍡 𠍢 𠍣 𠍤 𠍥 𠍦 𠍧 𠍨 𠍩 𠍪 𠍫 𠍬 𠍭 𠍮 𠍯 𠍰 𠍱 𠍲 𠍳 𠍴 𠍵 𠍶 𠍷 𠍸 𠍹 𠍺 𠍻 𠍼 𠍽 𠍾 𠍿 𠎀 𠎁 𠎂 𠎃 𠎄 𠎅 𠎆 𠎇 𠎈 𠎉 𠎊 𠎋 𠎌 𠎍 𠎎 𠎏 𠎐 𠎑 𠎒 𠎓 𠎔 𠎕 𠎖 𠎗 𠎘 𠎙 𠎚 𠎛 𠎜 𠎝 𠎞 𠎟 𠎠 𠎡 𠎢 𠎣 𠎤 𠎥 𠎦 𠎧 𠎨 𠎩 𠎪 𠎫 𠎬 𠎭 𠎮 𠎯 𠎰 𠎱 𠎲 𠎳 𠎴 𠎵 𠎶 𠎷 𠎸 𠎹 𠎺 𠎻 𠎼 𠎽 𠎾 𠎿 𠏀 𠏁 𠏂

(韻目は上平声四支)

不の旁で発音が「フ」
不 𠂔 𠂕 𠂖 𠂗

(韻目は下平音十一尤)

漢字音では不は「フ」、不は「ヒ」と異なるが、旁から見ると不にも不にもハイという発音があるし、ヒという発音もある。韻目は全て「平」である。だから音韻学の成果を待たなくとも、ハイ↓ヒの変化やハイ↓

フの変化はありそうである。

そこで類字の「非」についても調べてみた。

非の旁で発音が「ハイ」
俳排俳徘徊

非の旁で発音が「ヒ」

緋 誹 非 啡 俳 悱 毳 洴 洴 洴 洴 洴
 洴 洴 洴 洴 洴 洴 洴 洴 洴 洴 洴

非の場合には、「ハイ」と「ヒ」の読みを同時に持つ

漢字はないが、内容的には不丕と同じ結果である。

『論語』の時代の春秋後期には、不は「ハイ」と発音していて、これが戦国期に不(フ)と丕(ヒ)に分離して行つたと考えたい。これは鯨游海氏の考察ともほぼ一致している。

続いて、「弓」と「氏」について述べる。

いずれも「テ」と読むが、この中の「弓」は「康熙字典」に記載なく、日本で作られた「国字」とされていた。歴史的には推古朝から使われており、万葉集では、四千五百十四首の中に六百回ほど現れ、かなり多く使われた文字のひとつである。後世になっても助詞の通称に弓爾乎波「デニヲハ」と使ったり、平安時代の蝦夷の首長の名前を阿弓流爲「アテルイ」と表記している。

ところで、この弓の文字が、江田船山古墳の銀象嵌大刀銘文の中に「人名矢□弓」と出ているし、埼玉県稲荷山古墳の金象嵌鉄剣にも「……其児名弓已加利獲居……其児名半弓比」と二個所も出ている。

当時の人名にテ音が多かったようであるが、いずれにせよ、両鉄剣の百九十字の中に、弓が三回も現れているのである。

そうなる、古墳時代に既に、弓のような国字があったことになるが、それは極めて疑問である。万葉仮名の中にも、弓を除くと国字はない。

どこで造られた文字か。蓋然性の高いのは当然ながら朝鮮半島である。

そのため、韓国に滞在していた頃、朝鮮半島の金石文や『三国史記』や『三国遺事』に弓が見出せるのではないかと、あれこれと調査したが、何の手掛かりも得られなかった。

ところが平成十五年の年末になって、偶然『広開土王碑文』の拓本集を見ていて、そこに「幹弓利城」と二ヶ所も弓が出ているのを発見した。あれほど調べたのに、どうして見落としていたのであろうか。

理由は簡単であった。通常「広開土王碑文」として活字化されている「釈文」のほとんどが、この部分の弓を弓と判読したり、弓の真字として氏に書き替えていたのである。私はそれに気付かなかった。

さあ、また新発見で心が躍る。やはり、大刀や鉄剣の文字は朝鮮半島経由のものだったのだ。

しかし、こんな簡単なことが今まで見過ごされていたとはやはり思えない。冷却期間を置いて、その間に

徹底的に調べてみた。そして、いきなり興奮が醒めてしまった。既に森浩一先生がタッチの差で同じことを述べているではないか(注3)。

このような経過については、史遊会編『歴史のみち草』の「江田船山古墳の銀象眼大刀」に詳しく述べた。ただその時にどうしても解けなかった疑問が「氏」の替わりになぜ「弓」を使っただけである。第一、音韻学から見ても「氏」は「テ」と読めるが「弓」を「テ」と読むことは無理である。ここで再び A T O K の出番である。

氏の旁で発音が「テイ」 氏底低抵低抵低抵低抵低
張低低低

氏の旁で発音が「チ」 岷低低低低低低低低
(韻目は上平声八齊)

(韻目は上平声四支)

氏の旁で発音が「シ」 紙低低低低低低低低低
一方、弓を旁に持つ漢字は少なく、弓の他には躬と朽があるのみであるが、いずれも「キユウ」である。強いて言えば、弟が弓を含み「テイ」の発音を持つが、遠い関係である。

そうこうしている内に、弓の偏で氏の旁を持つ「張」という漢字に気付いた。「テイ」と読む。この文字を省略して書けば、氏にもなるし弓にもなる。

どうやら、弓のルーツ探しに答えを得た気分である。

おそらく間違いあるまい。

それと共に、「戸」「氏」「不」の下に「一」を添えている意味についても、おぼろげながら判った。「旦」の字を加えて考えると、いずれも「一」が示しているのは「大地」を意味しているのではないか。一字だけでも白川静先生なみの「解字」ができたとするならば幸せである。

追記 中国でも「君子不器」説

丕の語義を追いかけている最中に、中国でも「君子不器」説が発表されていたのに気付いた。それは『吉林師範大学学报』に載った胡翼氏の「浅談『君子不器』」で、投稿日が二〇〇五年七月である。鯨游海氏がその所論を最終的に纏めて発表したのが史遊会編『歴史に魅せられて』の「君子の器は大きかった」二〇〇五年二月であるから、いずれにしても鯨游海氏の方が早い。

そもそも鯨游海氏の「君子不器」説に初めて接した時に、すばらしい学説であるだけに、中国でも既に出されているのではないかと「危惧」した。『論語』の解釈が直接的な政争となっていた国であるから、そのために迫害された学者もいたのではないかと鯨游海氏に話したこともある。

中国の胡翼論文を一瞥して見た限りでは、鯨游海説の方が深みも厚みもある。いずれ、鯨游海氏から何らかの紹介もあらうかと思う。

かくして本稿は鯨游海氏に始まり鯨游海氏に終わる。

注釈

(注1) 金子真也「統計学的にみた七言絶句の平仄について」『人文学報(首都大学東京都市教養学部人文・社会系)』一六六(一九八四・三)

(注2) ①島崎藤村「惜別の歌」、②三角錫子「七里ヶ浜哀歌」、③ガイベル「流浪の民」、④「カルメン故郷に帰る」の木下忠司「そばの花咲く」

(注3) 本稿を執筆していた八月初旬、森浩一先生の計報に接した。二十年以上にわたり、いろいろなお世話になったが、晩年には、いつもご著書をお送り下さった。考古学の世界では「在野的な学者」であり、それだけに考古学ファンには特殊な人気があった。

森先生が私に先行して所説を発表したのは、一般市販本の『関東学をひらく』(二〇〇一)の「稲荷山古墳鉄剣銘」の項である。

表3 韓国漢字音と平水韻の対象表

四声韻目 (平仄)		末音が母音					
		아	애	어	에	우	으
		ㅏ	ㅓ	ㅗ	ㅛ	ㅜ	ㅡ
通用 II	上平④支	12	1			13	60
	上声④紙	13	3	1	4	8	75
	去声④寘	19	2	1	8	14	81
	上平⑤微						30
	上声⑤尾				1		15
	去声⑤未		2	7	1	1	18
	上平⑥魚			30	1	5	
	上声⑥語	2		39	13	6	
	去声⑥禦			30	1	3	
	上平⑦虞	1		1		42	66
通用 IV	上声⑦麌	1	1			41	39
	去声⑦遇					46	40
	上平⑧齊		2	7	14		5
	上声⑧霽			3	13		3
	去声⑧霽	1		9	56		5
	上平⑨佳	5	24		4		7
	上声⑨蟹	2	8				1
	去上⑨泰	1	17		1		11
	去上⑩卦	2	22		5		7
	上平⑩灰		22			2	11
通用 V	上声⑩脂		22				12
	去声⑪隊		37		10	1	9
	下平②蕭					86	1
	上声②篠					34	1
	去声②嘯					38	2
	下平③肴					31	1
	上声③巧					14	
	去声③效					16	
	下平④豪					50	1
	上声④皓					38	2
通用 VIII	去声④號					31	1
	下平⑤歌	69	2				
	上声⑤哿	24	1				
	去声⑤箇	28	4			1	
	下平⑥麻	69	1			2	
	上声⑥馬	23	1				
	去声⑥禡	28	3				
	下平⑦尤					9	92
	上声⑦有		1			5	59
	去声⑦宥	1				3	72
四声韻目 (平仄)		末音が鼻音 [ŋ]					
		앙	앵	앵	앵	옹	잉
		ㅁ	ㅂ	ㅅ	ㅈ	ㅇ	ㅇ
通用 I	上平①東					26	17
	上声①董					13	1
	去声①送					14	5
	上平②冬					30	1
	上声②腫					12	
	去声②宋					20	1
	上平③江	6				2	
	上声③諄	4				1	
	去声③絰	6				2	1
	去声③絰						
四声韻目 (平仄)		末音が鼻音 [ŋ]					
		앙	앵	앵	앵	옹	잉
		ㅁ	ㅂ	ㅅ	ㅈ	ㅇ	ㅇ
通用 VI	下平⑦陽	##					
	上声⑦養	59					
	去声⑦漾	66	1				
	下平⑧庚	1	24	84		2	1
	上声⑧梗		4	32			1
	去声⑧敬		4	22			1
	下平⑨青			58			
	下平⑩蒸	3		1		1	7
	上声⑩迥			17			50
	去声⑩徑			17		1	11
四声韻目 (平仄)		末音が鼻音 [ŋ]					
		안	엔	엔	엔	온	은
		ㅁ	ㅂ	ㅅ	ㅈ	ㅇ	ㅇ
通用 VII	上平⑪真					3	26
	上声⑪軫					1	9
	去声⑪震						13
	上平⑫文	1					34
	上声⑫吻						8
	去声⑫問						17
	上平⑬元	2					2
	上声⑬阮	14					11
	去声⑬願	9					7
	上平⑭寒	78					
通用 IX	上声⑭旱	34					
	去声⑭翰	61					
	上平⑮刪	43					
	上声⑮潸	16					
	去声⑮諫	18					
	下平①先	2	##			1	11
	上声①琰	3					1
	去声①霰	7					1
	去声①霰						
	去声①霰						
四声韻目 (平仄)		末音が鼻音 [m]					
		암	엠	엠	엠	움	임
		ㅁ	ㅂ	ㅅ	ㅈ	ㅇ	ㅇ
通用 IX	下平⑫侵	13		1			25
	上声⑫寢						3
	去声⑫沁	2					4
	下平⑬覃	47					
	上声⑬感	17					
	去声⑬勘	18					
	下平⑭鹽	1		40			
	上声⑭儼			19			
	去声⑭艱	1		19			
	下平⑮咸	7		3			
	上声⑮諫	4		3			
	去声⑮陷	5		7			

通用の区分は平水韻の韻目が通韻する範囲でグループ化したもの。
入声の終音については、通用 I と VI と VII が [k]、
通用 II と III が [r]、通用 IX が [p] なので省略した。